



環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2013年 秋期概要

## 2013年秋期の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2013年度秋期概要をお知らせします。

2013年度秋期調査は、2013年8月1日から9月30日までの期間実施されました。113ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査への参加は96ヶ所でした。



写真1. キアシシギ

### 4年連続の減少傾向

2013年度の秋期の一斉調査期間(9月8日を基準日とした前後1週間)では、47種 12,795羽が記録され、クロツラヘラサギ4羽が記録となり、秋期の最大個体数(調査期間内に記録された個体数の最大値)の合計は、49種 31,435羽が記録され、ヘラサギ1羽、クロツラヘラサギ29羽、ズグロカモメ1羽となりました。

2000年からの「全サイトの最大個体数の合計」と「連

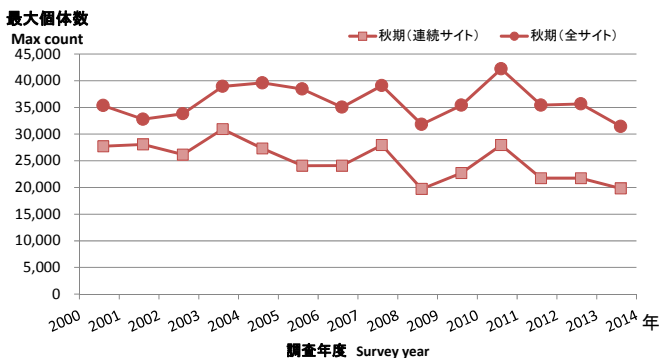


図1. 秋期調査の全サイトの最大個体数合計と2000年調査から連続調査しているサイトの合計の推移

続して調査が継続されているサイトの最大個体数の合計」を、グラフに示しました(図1)。最大個体数の合計は、今年

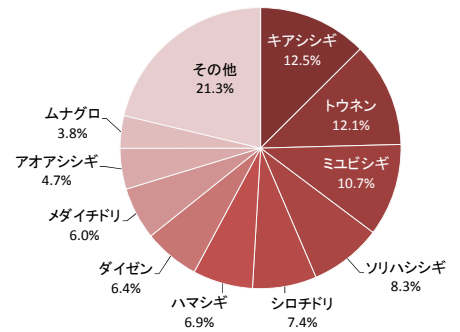


図2. 2013年秋期調査の優占種

度秋期は2008年秋期に並ぶ少ない水準でした。また、近年減少傾向が続いており、2010年秋期と比べ、全体の合計で約12,000羽、継続サイトの合計で約8,000羽が減少しています。

最大個体数合計における優占種の割合は、キアシシギ(12.5%)、トウネン(12.1%)、ミュビシギ(10.7%)、ソリハシシギ(8.3%)、シロチドリ(7.4%)の順でした(図2)。例年、秋期の優占種は、トウネンかキアシシギが最大となるのですが、この2種の動態を見るとキアシシギと比べてトウネンの各年の変動が大きく、トウネンの渡来数によって首位が決まるようです(図3)。しかし、キアシシギに注目するとトウネンと相反するように個体数が増減していることがわかります。

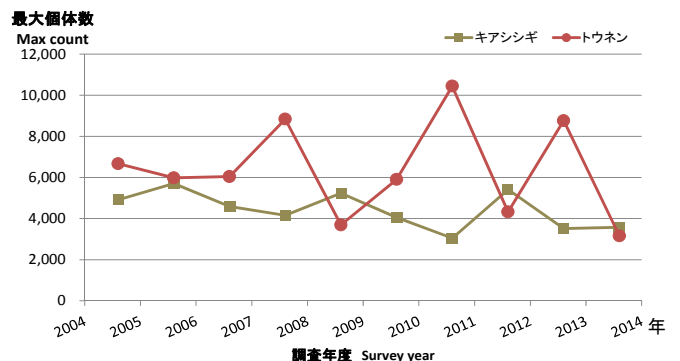


図3. 秋期調査を連続して行っているサイトのキアシシギとトウネンの最大個体数合計の推移

表1. 各種の2012年秋と2013年秋の調査に参加した108サイトの最大個体数の合計と前年度比。2012年を“1.0”として増減率を表記。赤色は昨年よりも20%以上減少した種。2013年秋に50個体以上確認されている種を対象とした。

種名	個体数			種名	個体数			種名	個体数		
	2012年秋	2013年秋	前年度比		2012年秋	2013年秋	前年度比		2012年秋	2013年秋	前年度比
トウネン	8705	3727	0.43	コチドリ	813	662	0.81	ヒバリシギ	154	188	1.22
キアシシギ	3813	3843	1.01	キョウジョシギ	592	609	1.03	アカアシシギ	126	180	1.43
ミユビシギ	3507	3322	0.95	オバシギ	508	686	1.35	ホウロクシギ	113	189	1.67
ソリハシシギ	2092	2597	1.24	チュウシャクシギ	454	623	1.37	オグロシギ	141	132	0.94
ハマシギ	2121	2166	1.02	タシギ	514	375	0.73	オオメダイチドリ	80	187	2.34
ダイゼン	2190	2020	0.92	イソシギ	394	471	1.20	ミヤコドリ	128	124	0.97
シロチドリ	1933	2256	1.17	ケリ	383	322	0.84	ダイシャクシギ	90	139	1.54
メダイチドリ	1499	1858	1.24	タカブシギ	178	320	0.85	コアオアシシギ	132	74	0.56
アオアシシギ	1474	1464	0.99	セイタカシギ	211	266	1.26	クサシギ	88	82	0.93
ムナグロ	1360	1077	0.79	オオソリハシシギ	270	199	0.74				

### 各種の前年度比

種毎に昨年秋の個体数と比較した表を表1に示します。トウネン(0.4倍)、コアオアシシギ(0.6倍)の減少が大きく、次いでタ



写真1. ダイシャクシギ

シギ(0.7倍)、オオソリハシシギ(0.7倍)、ムナグロ(0.8倍)が前年の8割以下となりました。特にトウネンは、北海道東部・東北部で前年の1割に満たない個体数となっており、コアオアシシギやオオソリハシシギも北海道東北部で減少していました。調査期間中、北海道では大雨の影響で潟湖干潟などの水位が高かったことなどが影響として考えられています。ムナグロは、関東内陸部周辺で前年の3割程度でしたが、沖縄周辺では増加しており、中継地での滞在時間が短かった可能性があります。

逆に観察が増えたのは、オオメダイチドリ(2.3倍)、ホウロクシギ(1.7倍)、ダイシャクシギ(1.5倍)などです。オオメダイチドリは、観察された総数は多くないものの全国的に増加傾向でした。ホウロクシギ、ダイシャクシギはともに有明海などで増加傾向が見られました。大型シギの2種にとって餌の量や干潟の面積など条件の良い採食環境が有明海周辺にあるためだと考えられます。

### 絶滅危惧種の記録

絶滅危惧種のシギ・チドリ類 12種の内、絶滅危惧 I A類のヘラシギのみ今秋期確認がありませんでした。今年度春期調査に続いてとなり、秋期に確認される例が多いだけに、個体数の減少が懸念されます(図4)。

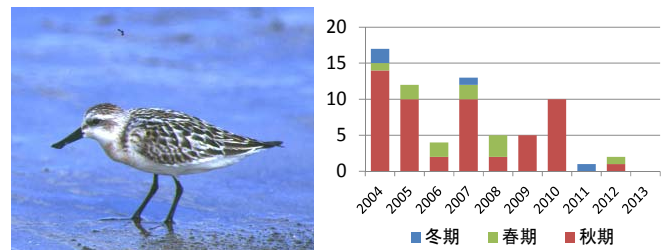


図4. ヘラシギの最大個体数の推移

絶滅危惧 II 類のオオソリハシシギは、春期2,376個体から秋期199個体となりましたが、これは、もともと秋期の渡り時には、日本を通過する個体が少ないためです。図5に示すように春期と秋期とで平均約8倍の差があり、渡りルートが異なることを示唆しています。

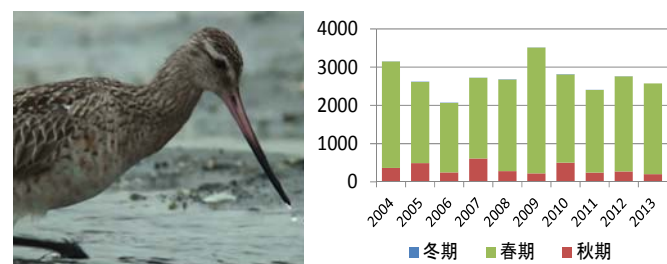


図5. オオソリハシシギの最大個体数の推移

## モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター 2013年 秋期概要

タイトル写真:オオソリハシシギ

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史 電話/Fax:042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp